

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21730499

研究課題名（和文） ポジティブ／ネガティブな自己認知が目標追求行動に与える影響

研究課題名（英文） Effects of positive/negative self-perceptions on goal-pursuit

研究代表者

尾崎 由佳（YUKA OZAKI）

東海大学・チャレンジセンター・講師

研究者番号：50459434

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ポジティブあるいはネガティブな自己認知がそれぞれどのような状況において目標追求を促すのかを検討することである。促進焦点が活性化している場合はポジティブな自己認知によって利得接近行動が増され、予防焦点が活性化している場合はネガティブな自己認知によって損失回避行動が増進されるだろうという予測を検証するために、研究1～7を実施した。その結果、過去の質問紙調査データについて再分析を行った研究1～2、および質問紙実験を用いた研究4～5においては仮説が支持されたものの、実験室実験を用いた研究6・7ではいずれにおいても仮説は支持されなかった。研究手続きの改善を加えつつ検討を進めることが必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the studies were to investigate under which conditions positive/negative self-perceptions impose promoting effects on goal-pursuit. Seven studies were conducted to test the following predictions; under promotion-focus, positive self-perception would foster gain-approaching tendencies, while under prevention-focus, negative self-perception would foster loss-avoiding tendencies. Full support for these predictions was obtained in Studies 1-3 in which data from previous surveys were re-analyzed, and pencil-and-paper experiments in Studies 4 & 5 produced partial supports, although none of the predictions was supported in experimental settings (Studies 6 & 7). Further investigations will be necessary to test the validity of these predictions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	311,511	93,454	404,965
2011年度	288,489	86,546	375,035
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：制御焦点・自己制御・自己認知

1. 研究開始当初の背景

「ポジティブな自己認知が適応的な自己制御をもたらす」という説は、長年にわたり数

多くの研究者が主張してきたことである (e.g., Armor & Taylor, 1998)。すなわち、自分自身をポジティブに認識していること

(例：自分の能力や特徴を高く評価したり、将来を楽観視したり、過去の成功経験に注目したりする)によって、目標追求行動が促進され、その結果として優れた成果が達成されるという。しかし、実証データは必ずしもこの主張を支持しない。たとえば、高自尊心によって優秀な学業成績や社会的成功がもたらされるという因果関係を検討した研究のうち、ごく少数がわずかな効果を報告しているものの、それ以外の多くの研究では因果関係が認められなかった(see, Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003)。つまり、ポジティブな自己認知が適応的な自己制御をもたらすという説は広く知られているが、実証研究の結果は一貫せず、それを支持しない研究例も少なからず存在する。

研究結果が一貫しないということは、ポジティブな自己認知が適応的な自己制御を促す状況と、そうではない状況が混在していると解釈できる。さらに、場合によっては、ネガティブな自己認知が適応的な自己制御を促すような状況が存在する可能性も否定できない。すなわち、状況によってどのような自己認知が最適であるかが異なっていると想定するのが妥当であろう。

では、どのような状況において、どのような自己認知が、適応的な自己制御を促進するのか。その関係性を特定する必要がある。この問題意識が本研究の発端となり、自己認知と自己制御の関係についてモデルを構築し、それを検証することを目的として、本研究を実施した。

2. 研究の目的

本研究は、Higgins (1998)の提唱した制御焦点理論、すなわち促進焦点と予防焦点の各システムが、異なった特徴をもつ自己制御プロセスが司っていると考え方に基盤をおいている。促進焦点のシステムは、利得の可能性が高いと認識したときに利得接近志向を増進させるという。一方、予防焦点のシステムは、損失の可能性が高いと認識したときに、損失回避志向を増進させると考えられている。

本研究では、促進焦点と予防焦点の各システムにおいて、ポジティブあるいはネガティブな自己認知がどのようなフィードバック機能を果たすかについて着目した。ポジティブな自己認知は、促進焦点のときには利得の可能性が高いことを意味し、予防焦点のときには損失の可能性が低いことを意味すると考えられる。逆にネガティブな自己認知は、促進焦点のときには利得の可能性が低いことを意味し、予防焦点のときには損失の可能性が高いことを意味すると考えられる。

したがって、以下の仮説が導かれる。促進焦点が活性化している場合はポジティブな

自己認知によって利得接近志向が増進されるだろう(仮説 a)、一方、予防焦点が活性化している場合はネガティブな自己認知によって損失回避志向が増進されるだろう(仮説 b)。これらの仮説について、研究1~7によって検証を行った。

3. 研究の方法

研究1・2・3では、研究代表者(尾崎)が過去に収集した質問紙調査データについて再分析を行い、仮説 a, b が支持されるかを検討した。研究4・5では、質問紙実験を用いて、尺度測定された利得接近志向と損失回避志向を従属変数として、仮説を支持するパターンが見られるかを検討した。研究6・7では実験室実験を行い、参加者の行動を従属変数として仮説を支持するパターンが表れるかを検討した。

4. 研究成果

研究1~3：調査データの再分析

過去(2007~2008年)に実施した質問紙調査データの再分析を行い、利得接近志向・損失回避志向と自己認知のポジティブさ・ネガティブさとの間の相関関係について検討した。

研究1は、自己認知のポジティブさ・ネガティブさの指標として自尊心を取り上げた。調査対象者は、大学生50名(男10名、女40名、平均年齢=20.98, $SD=6.96$)であった。調査対象者は、利得接近志向・損失回避志向を測定するPPFS邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)に7件法で回答した後、ローゼンバーグ自尊心尺度(山本・松井・山成, 1982)に4件法で回答した。その結果、自尊心は利得接近志向と正相関し、損失回避志向と負相関した($r_s=.37, -.40, p<.01$)ことから、仮説 a, b ともに支持された。

研究2では、自己認知のポジティブさ・ネガティブさの指標として性格特性語に対する自己評価を取り上げた。調査対象者は、専門学校生129名(男2名、女126名、不明1名; 平均年齢=18.77, $SD=1.01$)であった。40語の性格特性語について、それぞれ自分にどのくらいあてはまるかを1. 全くあてはまらない~7. 非常にあてはまるまでの7件法で評定した。続いて、PPFS邦訳版に7件法で回答した。これらのデータに基づき、自己評価の肯定性・否定性と利得接近志向・損失回避志向の関連について、それ以外の変数を統制した偏相関を算出した(たとえば、自己評価の肯定性と利得接近志向の偏相関を計算するときには、自己評価の否定性および損失回避志向を統制した)。その結果、自己評価の肯定性(肯定的特性語にあてはまる程度)は利得接近志向と正相関し、自己評価の否定

性（否定的特性語にあてはまる程度）は損失回避志向と正相関した ($r_s = .45, .25, p < .01$)。自己評価の肯定性と損失回避志向、自己評価の否定性と利得接近志向の間にはいずれも有意関連が見られなかった ($r_s = -.08, -.11, ns$)。したがって、仮説どおり、自己評価の肯定性が高いほど利得接近志向が強く、自己評価の否定性が高いほど損失回避志向が強いことが明らかになった。

研究3では、自己評価測定について手続き的改善が加えられ、調査参加者が自分自身について思い浮かべるイメージ内容の肯定性および否定性を分析した。調査対象者は大学生39名(男32名,女7名,平均年齢=20.03, $SD = 1.09$)であった。大学の授業時間中に1週間隔で2度にわたる質問紙調査が行われた。まず1度目の調査として、回答者はPPFS邦訳版の16項目について1.全くあてはまらない~7.非常にあてはまるまでの7件法で評定した。その1週間後に2度目の調査として、“私は”から始まる20の文章を作成させる二十答法に回答させた。回答後、これらの20項目のうち長所だと思ふ記述数(自己評価の肯定性の指標、短所だと思ふ記述数(自己評価の否定性の指標)を調査対象者自身にカウントするように求め、調査用紙に記入させた。自己評価の肯定性・否定性と利得接近志向・損失回避志向の関連について、それ以外の変数を統制した偏相関を算出した結果、自己評価の肯定性は利得接近志向と有意傾向の正相関が見られたが、損失回避傾向とは無相関であった ($r = .31, p = .07; r = -.26, ns$)。自己評価の否定性は損失回避志向と有意に正相関したが、利得接近志向とは無相関であった ($r = .33, p < .05; r = -.12, ns$)。したがって、仮説a, bともに支持された。

以上をまとめると、研究1~3を通じて、自己評価のポジティブさは利得接近志向と正相関し、自己評価のネガティブさは損失回避志向と正相関するという一貫した結果パターンが示され、仮説が全面的に支持された。

研究4~5：質問紙実験による検討

研究4では、制御焦点の活性化と自己認知の感情価を実験的に操作して検証した。大学生81名が実験に参加した。回答に不備のあった者6名を除き75名(男30名,女45名,平均年齢 = 19.45, $SD = 1.60$)を分析対象とした。4種類の質問紙をランダムに配布することにより、2(制御焦点の活性化操作：理想プライミング条件/義務プライミング条件)×2(自己認知の感情価操作：長所注目条件/短所注目条件)の各4条件に参加者をわりあてた。大学の授業時間中に質問紙実験を行った。まず制御焦点の活性化手続きとして、理想条件の参加者は自分の理想について、

義務条件の参加者は自分の義務について6分間自由記述した。続いて、自己観の感情価の操作を行った。長所注目条件では「あなたの長所や、得意なこと、優れていることは、何ですか？」という設問に回答した。短所注目条件では「あなたの短所や、苦手なこと、劣っていることは、何ですか？」という設問に回答した。次のページでは、制御的志向性の測定としてPPFS邦訳版に7件法で回答した。

利得接近志向を従属変数として、2(制御焦点の活性化操作：理想プライミング条件/義務プライミング条件)×2(自己認知の感情価操作：長所注目条件/短所注目条件)の被験者間要因の分散分析を行った。いずれの主効果および交互作用効果も有意ではなかった ($F_s < 1.16, ns$)。各条件の平均値を表したのが図1である。次に、損失回避志向を従属変数として、上記と同じデザインの被験者間要因の分散分析を行った。

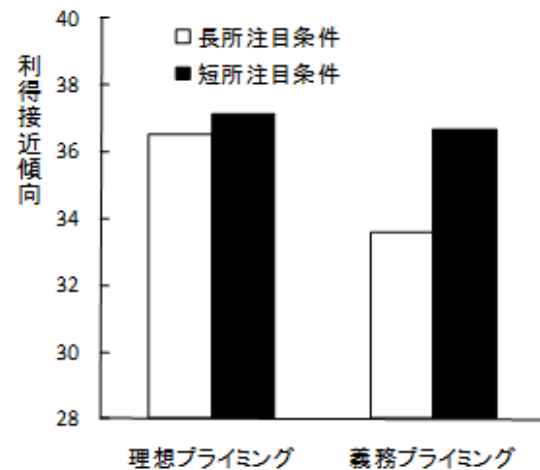


図1. 制御焦点および自己認知の感情価を操作した後の利得接近志向

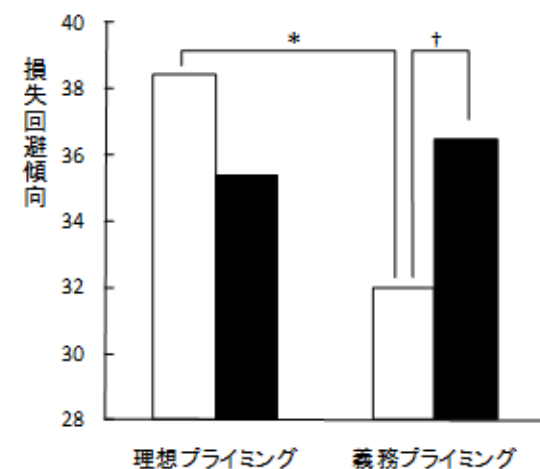


図2. 制御焦点および自己認知の感情価を操作した後の損失回避志向

制御焦点操作および自己評価操作の主効果はいずれも有意ではなかった ($F_s < 2.59$, ns)。2 要因の交互作用効果が有意であった ($F(1, 71) = 5.09$, $p = .03$)。各条件の平均値を表したのが図2である。交互作用効果の詳細を検討するために、単純効果の検定を行った。結果、理想プライミング条件においては長所注目条件 ($M = 38.45$, $SD = 8.22$) と短所注目条件 ($M = 35.39$, $SD = 8.83$) の差は見られなかった ($F(1, 71) = 1.70$, ns)。一方、義務プライミング条件においては条件間の差に有意傾向が見られ ($F(1, 71) = 3.55$, $p = .06$)、長所注目条件 ($M = 32.00$, $SD = 5.85$) よりも短所注目条件 ($M = 36.47$, $SD = 5.34$) の方が強い損失回避志向を示した。つまり、仮説 a は不支持であり、仮説 b は支持された。

研究5では、研究4の手続きを改変し、日常的な文脈 (友人関係) において自己認知を操作した。大学生108名 (男50名, 女58名, 平均年齢 = 20.23, $SD = 1.90$) が実験に参加した。4種類の質問紙をランダムに配布することにより、2 (制御焦点の活性化操作: 理想プライミング条件/義務プライミング条件) \times 2 (自己認知の感情価操作: 長所注目条件/短所注目条件) の各4条件に参加者をわりあてた。大学の授業時間中に質問紙実験を行った。質問紙には「大学生の人生観に関する調査」というタイトルが付けられていた。まず、理想プライミング条件の参加者は自分の理想について、義務プライミング条件の参加者は自分の義務について6分間自由記述した。続いて、自己認知の感情価の操作を行った。長所注目条件では「あなたの親しい友人たちは、あなたのどんなところに対して好意を持ったり、高く評価したりしていると思いますか?」という設問に回答した。短所注目条件では「あなたの親しい友人たちは、あなたのどんなところに対して不満を持ったり、低く評価したりしていると思いますか?」という設問に回答した。最後に、結果予測の測定として、楽観的予測と悲観的予測を測定する各5項目について、1. あてはまらない~5. あてはまるまでの5件法で回答した。

楽観的予測を従属変数として、2 (制御焦点の活性化操作: 理想プライミング条件/義務プライミング条件) \times 2 (自己認知の感情価操作: 長所注目条件/短所注目条件) の被験者間要因の分散分析を行った。制御焦点の活性化操作および自己認知の感情価操作の主効果はいずれも有意ではなかった ($F_s < 1.8$, ns)。2要因の交互作用効果が有意傾向であった ($F(1, 104) = 3.22$, $p = .08$)。各条件の平均値を表したのが図3である。交互作用効果の詳細を検討するために、単純効果の検定を行った。結果、理想プライミング条件においては条件間の差に有意傾向が見られ ($F(1, 104) = 3.65$, $p = .06$)、長所注目条件 ($M = 3.79$, SD

$= 0.54$) の方が短所注目条件 ($M = 3.47$, $SD = 0.72$) よりも強いポジティブな結果予測を示した。一方、義務プライミング条件においては長所注目条件 ($M = 3.42$, $SD = 0.61$) と短所注目条件 ($M = 3.52$, $SD = 0.61$) の差は見られなかった ($F < 1$, ns)。次に、悲観的予測を従属変数として、2 (制御焦点の活性化操作: 理想プライミング条件/義務プライミング条件) \times 2 (自己認知の感情価操作: 長所注目条件/短所注目条件) の被験者間要因の分散分析を行った。いずれの主効果および交互作用効果も有意ではなかった ($F_s < 1$, ns)。各条件の平均値を表したのが図4である。つまり仮説 a は支持されたが、仮説 b は不支持だった。

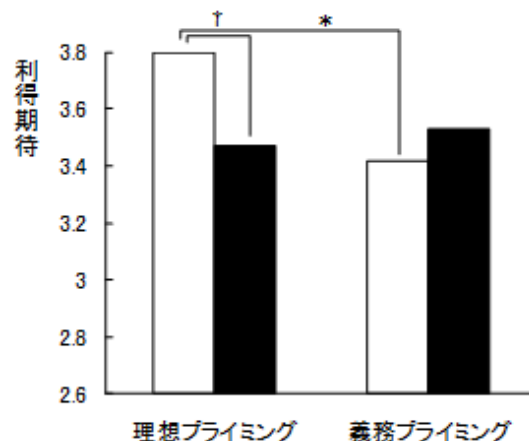


図3. 制御焦点および自己認知の感情価を操作した後の楽観的予測 (利得期待)

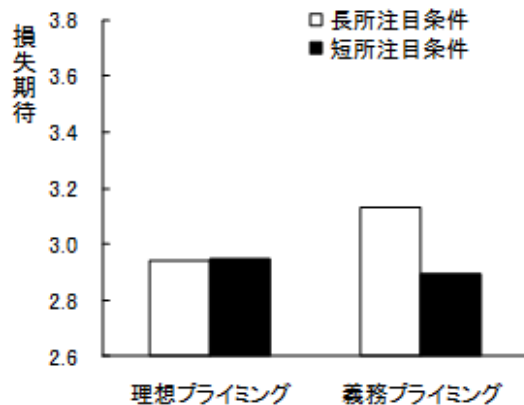


図4. 制御焦点および自己認知の感情価を操作した後の悲観的予測 (損失期待)

研究5~6: 実験室実験による検討

研究5では、制御焦点および自己評価を実験的に操作した際に、後続課題に対するエンゲージメントにどのような影響が生じるかを検討した。促進焦点の場合は自己評価を高める操作を受けた方が、後続課題にエンゲージするため成績が良くなるだろうと予測した。一方、予防焦点の場合は自己評価を低め

る操作を受けた時にエンゲージメントが高まり、後続課題の成績が上がるだろうと予測した。実験には大学生 67 名（男 40 名，女 27 名，平均年齢 = 20.11， $SD = 1.60$ ）が参加した。参加者はまず制御焦点の操作として理想プライミング条件あるいは義務プライミング条件に割り当てられ，自分の理想あるいは義務について記述する課題に取り組んだ。続いて自己評価の操作として以下の教示を与え，選択させた。「これからアナグラム問題に取り組んでもらいます。まず練習問題 A, B の中からいずれかを選んでください。A は解きやすい練習問題なので，あなたの強みを見つけて，本番に向けて自信をつけるために役立ちます。B は解くのが難しい練習問題なので，あなたの弱みを見つけて，本番に向けて自信過剰にならないために役立ちます。」実際には A, B の練習問題の内容はまったく同じであった。練習問題に取り組んだ後，本番問題として同様のアナグラム課題に取り組ませ，その成績を記録した。

アナグラム課題の成績を従属変数として 2（制御焦点の活性化操作：理想プライミング条件／義務プライミング条件）× 2（自己評価操作：高評価条件／低評価条件）の被験者間要因の分散分析を行った。主効果および交互作用効果はいずれも有意ではなく ($F_s < 1.5$, ns)，仮説は支持されなかった。

研究 6 では，社会的に排斥される状況をつくることによって制御焦点を操作した。社会的排斥は，すなわち社会的損失を意味するため，予防焦点を活性化する (Molden et al., 2009)。また，自己認知の感情価については，身体的温度によって操作した。身体的温度の温かさは所属欲求を満たすという (Bargh & Shalev, 2011)。集団から受容されているかどうかという認識は自尊心に影響を与える (sociometer; Baumeister & Leary, 1995)。つまり，身体的温度において“温かさ”をプライミングすることは，すなわち自己認知をポジティブにすること，逆に“冷たさ”をプライミングすることは自己認知をネガティブにすることの間接的操作になる。したがって，社会的に排斥されて予防焦点が活性化しているときに，身体的な“冷たさ”を経験して自尊心が下がると，損失回避的志向が高まるだろうと予測した。損失回避志向については，低地位の他者に対して受容を求める（すなわち拒絶の可能性を低める）程度を指標とした。

大学生 48 名（男性 26 名，女性 22 名，平均年齢 20.10 歳）が参加した。参加者はまず Cyberball 課題 (Williams et al., 2000) に取り組み，排斥条件か受容条件のいずれかに割り振られた。続く課題では，半数の参加者には冷たい物を持ってもらい，残りの参加者には温かい物を持ってもらうことで，身体的温

度の操作を行った。ビジュアルドットプロブ (VDP) 課題を行い，高地位ターゲット（中年の顔）と低地位ターゲット（児童 (小学生) の顔）に対する注意の程度を測定した。

キー反応が誤っていた試行，および反応時間が平均 $\pm 3SD$ の範囲に収まっていなかった試行を除外し，成人の顔写真が表示された試行と児童の顔写真が表示された試行の反応時間の平均を求めた。これらの指標について，2（排斥）× 2（身体的温度）× 2（ターゲット）の分散分析を行った。その結果，排斥の主効果のみが有意傾向であった ($F(1, 41) = 3.26$, $p = .078$)。すなわち，排斥された参加者の方が受容された参加者よりも，写真の種類に限らず，顔写真に対する注意が増加していたという結果であり，仮説は支持されなかった。

総合考察

研究 1～5 の結果より，自己制御過程において自己認知のポジティブさ／ネガティブさがフィードバック機能を果たし，利得接近行動や損失回避行動を調整していることが示唆された。このようなフィードバック機能は状況に応じた柔軟な行動調整に役立っており，結果として効率的な目標達成を実現させているという可能性も考えられる。ただし，実験室実験を試みが研究 6～7 とともに仮説が不支持であったため，今後の研究において実験手続きを改善するなどして引き続き検討を進めることが必要と考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 尾崎 由佳・唐沢 かおり (2011) 自己に対する評価と接近回避志向の関係性——制御焦点理論に基づく検討——心理学研究, 82, 450-458. (査読有り)

② 尾崎 由佳・唐沢 かおり (2012) 自己評価と接近回避志向——制御焦点の活性化による相関関係の変化——対人社会心理学研究, 12, 59-66. (査読有り)

〔学会発表〕（計 4 件）

① 尾崎 由佳・唐沢 かおり 制御焦点の活性化とポジティブ／ネガティブな自己側面への注目が利得接近傾向と損失回避傾向にもたらす影響 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第 56 回大会合同大会 2009 年 10 月 12 日 大阪大学

② 尾崎 由佳 自尊心の自己制御機能について：戦略的な自己高揚と自己卑下（ワークショップ：自己制御研究の最前線一人はいかにして困難を乗り越えて目標達成するか）

日本社会心理学会第 51 回大会 2010 年 9 月
17 日 広島大学

③ 尾崎 由佳・唐沢 かおり 自己制御過程に
おいて自己観のポジティブさ／ネガティブ
さがもたらすフィードバック効果 日本心理
学会第 74 回大会 2010 年 9 月 21 日 大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 由佳 (YUKA OZAKI)

東海大学・チャレンジセンター・専任講師

研究者番号：50459434